渋々文集

前編

一

利
996
1

門 科
鶴 954
巻 1-3

帝國圖書館藏

序

梅洞

古之又云衆砂之門淡之又淡名味之至深者四楊明之三楊一以德顯一以位彰名因實之實實豈不符於名哉吾後三楊子淡之義先知之知也三楊子者談諧之雄也其原出於

帝國圖書館藏

貞翁ヨリ傳ヘ於晉子ニ楊義ニ氷青ストト
爲云ヒ而著ハス俳文ノ篇ヲ罷ヒ非鯨
呑新鄭ヒ珠纓ヲ操テ毫ヲ吟ジ須臾ニ
成ニ可ル謂ナリト巧矣ナリト可ル謂ナリト怪哉ナリト集成テ
序ヲ爲ヤ不敏ナリ拙ニ述テ其ノ見ヲ以
贈ル或ハ曰ク子ハ儒雅士ナリ序ニ俳ニ如カ何ト曰
呼イヤシイ哉ヤ言也請ニ不ヲ云ハ乎ヲ義ヲ戲ニ譲ス尤ヲ
不ル爲ニ震アシ苦ト立ツ三代ノ之ヲ楷ヲ以テ戲ヲ祭リ九鼎ノ
之ヲ象ヲ以テ戲ヲ鑄ル俳カルヲ大禮器ヲ移ス於リ其ノ
天自ニ天地ノ之分ニ氣ヲ化ス宇宙ニ
物トメ事トメ非ト戲ニ也カ白ヲ謂ル女ヲ爲ニ戲ニ
英土ニ搏マロメテ爲ニ異ヲ人ト良ニ幾ヲ義ヲ以テ他ハ

者一大劇場也生化者大劇多也
茅狗者生未淨且也死生得失亦
采菜於古演劇也篇場影閑雅
俗多看世之齋傷無士以抒胸孔
口談芝居高自標異以爲得禮法
自我觀之抑亦惟戲必已無多補
之戲亦戲耳文字禪游戲三昧於
楊子文庵於乞觀
寛保辛酉暮春集滄浪舟撰

州翁 徐禮

序

物茂卿議和歌云。三十一字俳
離之言。不足道。蓋東人而華其
叛者。固一家云耳。而伯陽嘗語予
曰。山度痾傷楓柳株美則美矣。
不如我猿大夫紅葉為吟佳人

易歳ゝ為愈也。伯陽善善音
綜情之藻林。其品不出於下。
而ゝ云やめ此。可謂知言哉。夫
俳諧古國風ゝ一数。降而為今
之俳諧。亦已尚矣。抱與人冥契与
詞長。乃能穣俗于雅。採雅于俗。目

中無不可象ゝ景。心曲無不可説
之情。上のゝ告
玉皇天将。ゝの心諭牙侍屠兒。亦
一種風体や。頑伝陽ハ言中人。
必論已段令義ゝ見ゝ。不覺伝
死而頤ヲ曰勝讀齋搢大詠芸詩

矣。就謂諸子道汙辱三楊氏少
從東都寶晉子學諸。之炼句也。
去皮得骨。太皆得髓。奇如天吳
九首卷潮。一一噴出幻如彩士彩
黃黑綬黑巢不見之絵。鋭刃一の
異如老衲搖人隻笑射倒塵中ノ

蓋豔而一の怜。如雛妓携手枝近
歌眼注。変態百出。左太逆原
去諸寸裁。日晋子諸歌。海内爭
傳。又張屬諸文。不著新桂集ハ
于世惜乎人亡槃存。寥々乎安寝
吟矣。三楊氏克繼之志。毎與至

雜修文辭以自樂。英華精彩。亦
偕之餘。宋大尉袁淵采文
章佚人。笑志次而彙之。名曰俳諧
集。蓋文章而俳諧者也。亦本人
假女字寫男稱者。徒能爲最。
而采白集殿之當以原語枕卅爲

藍本。而間名之未嘗少俳諧
者也。晉与楊。則俳諧而文章焉
者非邪。予冠紐而佩史爺宣尼
而娘迦文。廼文廼詩。乃詩餘。乃
俳奇。乃和歌。乃俳諧。性靈攸發。
莫不染指。以方二子お諧社爲金

蒙久矣。今曷今茲編成請晃。
因筆ノ序ニ云授ヲ
寛保辛酉秋九月
赤松山人茂毛辰士郎

福井藩
藩士
渡邊崋山

世度々書之ヲ序ニ序跋二ツ進ム法正爲不爲ル
序ヲ不作ル事ヲ
一泥溺ス文章ヲ者ハ拙ク和文章ヲ者ハ又一
篇ヲ立ル所先ヲ述ル事ヲ物ノ終実始祀始実終祀
始実終実全体四季叙述跋神ト者皆三遺記
ヲ以テ足ル而ル作ル也
一泥溺文章ヲ集ル者ハ板行の一書ヲ足ル而ル
安ヲ家ヲ遺記ヲ教ヲ為ル
永拙ク不苦ル所以歟矣ル

一御傘之外部分御之字又春吟堂山の井四季の和
御之字御之又御の字まゝ言不切り終歌
一義人物以百韻之序は概書者之没後準的候こ
と数く風流減しこと の数十年と切り十年と切
是は先師之付は素者而已ゆえ其元実へ数十年と
今日之こと切り下は御清長之御と切り今羅人附は新
元を立つと切り序跋也選元を参る事 於うゝ書を
一世を格言は為之事之門下之祖宗数代世
元は誓り仕事下
一源氏之こと素性句ふつうにふ事記ふもしる事一句

住坊を不接百くなりすれり去年元を矣れ
事ふ
一師道とても事ゝを沙道と云元多一師道が名言き
去られは世子必上まゝ云るも於一度人之千ゝ世
子諸子和四又人と下へ一下まれ沙道ゆも上ゝ有之の
有り先は為下盗跖析下恵ゝこゝ肉刑不を居跖
も性ふよへ上まれ世子ふ下まも多く元実へ
大六ゝ乗永ゝ

返事 上下略

兄弟有て母ゝ兄非 [竹もおきと云事人家長家紀三名へう] 跡競馬ゝ仕事下原下答

俳諧文章を月雪花章日章と唱ふして字ふ去
ちゝ抽写和文章といふちり抽俳祈ちゝちゝ
ゝ幸ニ遺池ハ不拙ゝ和漢ハ百きゝ云不能の
和ふ和ア小俗呼てきびしきゝをふハ能きゝい
ぐんゝ云去去写俳ゝ云幸ふ也ハ人の云
ゝ之過て陋るふ悔るゝ字ふこれゝ云俳ゝ年者ゝ
奴僕も云なゝハ口癖のやゝふ只のたゝ人言をいふゝ
俳諧文章ゝ云ふハむさと俗語をつゝふゝ不ふ能ゝ
彼ゝ真を面白たゝへゞんゝ云人ゝ俳の字ゝ人偏ゝ
ゝくひちゝへし俳の字ゝを書く俳ゝ云不知ゝ是ハ俳

けちくゝとゝ字ゝハ初ゝ云ハ初ゝ事也拙筆の外能ハ
屋ゝまゝゝや又坂山の井の秀ゝ此不の俳乃字ハ秀ゝ妻ゝ
ゝ字ゝ者ゝ云秀ゝ又ハ者ゝ債ゝ秀ゝ俗語ゝ陋ゝ又人偏
言偏ゝ年紛ゝ不能ゝ也ハ中真ゝ字ゝ妻ゝ
能字ゝを費ゝ字ゝ用痛ゝ字ゝ道ゝ真ゝ俳ゝ
ゝ人ゝ能蛮ゝ不ゝ能ゝ流川の流ゝ論ゝ八雪能抽ゝ
能月ゝ偏ゝ年誤ゝ有ゝ不ゝ且又ハ変ゝ序ゝ字ゝ
出ゝ不ハ不言成教ゝ云ゝ四字ゝ

かゝ和ふゝむ字ゝてむうふ花の新

俳諧ふハゝゝれ字体ゝ句ゝゝ関ゝ

紙

清くきへ

此歌文を蓑笠の法自筆なる物うれしく今と而指紙ト

又

海ちとみんとすれ共も山ゝへ〳〵今の紙詣

の句をかくもかへ〳〵紙の句をして行うれし

発句ハ林夕君也御紙を 中院内府公御深草ゆかれ

深草四郎の風雅の紙摘なるへ〳〵太麻ふくし末の雪

お止へ〳〵甚角没テ後紙詣奥廃ゆきうよし文字緑

の人なるへ〳〵風風不ゆ或ゆ行ても寒號虫めうく行て紙

道の黒白ゆうあるハしゆふたゝす菊ふゆゆかし稲

穂ゆハ馬ゆゝと定ゆゝくひなゝん玄可笑十指十月也

云紙ハ紙夕ふ吐て一筆くの事不束内ゆ志ゆも信樣略可の

事皆笑ゆふの紙ゆ

師匠てもなきをゆとゆゆ時代遠ひ教多ゆ紙ゆ先

ゆを殊勝の俳ゆて有立ゆゆゆゆゆゆゆ事ゆゆ

うゝゆゆくゆゆへしさすゆ風雅の道ゆゆ名実ゆ筋ゆく筋

ゆしくゆゆゆゆゆ可責ゆゆ及ゆて会俳ゆ間祥天

麓といひしゆる日蓮ハ師匠ゆ上ゆゆ

源氏を句ゆて御ゆ角ゆ嬢ゆゆ又ごゆく

かくらすのすにさいひ出たりこそしくのよしなにこそ不似合を
んの志らるゝものなり句に句をやなるもののあり文章に
紫雲の事僧馬等になぞよろし源氏に源氏にも數多出しを
長嘯もこれまでより文章こゝには源氏によりてハ天竺文章
とこゝへし用ると枝るはりかいつゞきてゝまでどめる抑まこと
とありやをおもらめる是りのよき無ふハ經緯の文章有りて
いやに定へけ候ともおもきをえらびんのをいふ事半様にありぬ
文章もまへしさ也陸附ハおほみれほつかなき源経
をりて書場をを補ひ侍り古雲之を起しる紫つるとは無
文章に半ばなよし一字をも風色をも引よきりて和をは

をまへしと又打充をくも撰る文章没存されを不許
して一派の人々が一冊となりしや貴子もなへしや反
古となりてもかく評するに書肆篠外とと
怒ふ志こあれてや南紀祇園先生赤府栗田先生へ叙
志（冊彼座侍言生之）日く光をもて不正病充字に似ゆうしく見て
ちちゑ合遊ふまて来りて彼らん我に今鳥を愛し雪
夜の侍家の家によ是硯ふ入がらし墨白おのにのさる
ことの朝に上三鳥君之跋爾り首尾調候絶く法
早の不ちの扇にゐ盈山の書籍桐梧侍の餘りを親に見
錦仲の朝寫一墨に蘇徽和くこの書秘藏あり一巻為

の陸奥古木写て送る 光廣卿に唐山を給ふ

石を石也意有如何望事間不容髮哉

相用事武士に甲冑山伏に兜巾

もつさけて床の上ふをついもつまるこ千

世界九千八海　爲子判

元光卿唐山の格言海ア[illegible]

洛〻文集巻第一

目録

序　仮のこゝろ

二　和仮を附す序

三　歩蓴の説

四　堀西北坡ふ船茶迄ふ

五　雑話盗人に禅

六　玄波州

七　楚八四日経渡

八　東賀へおくる

九　惠南律師稀年賀

十　右日荀茂弼一人ヨ酬フ

十一　琵琶湖

十二　雜話六章　本筆不野敎のゆあり知山の体立也

十三　擯梟禪を彷彿

十四　陸琳旅宿ク彷ラる文

十五　紀陽ヲ樹亭ヲ拾フ

十六　竿秋を送ること

十七　病外并恍夢

十八　寓天ヲおくる示敎

第一　飯乃辞

眼ヲ愛し耳をうるふ事。梟うこあのし喉吻茶

乃支。茶ヲ奥ヲ酒ヲ蓮ヲ。やヲ切くきすの衣

毎ゆ墓ゆ。初音茶毋押わのわて。すくとゆひ好

むと名つけを品を重し。今古風流ヲ培ふ也

驛七亭ハ大津ノ角上也　色ヲんを書ヲ境ヲ舞。寔ヲ瞬ヒ亭の地

從来飯を炊して至ては好すゝ。さわを百費弦

百費ノ芋ハ徒然卅　芋かしら城吟重しをハ。独うをあさ服うち

多くを煮を炊ヒ切ハ。ひうハ物く言尚

ふしく異なり。此発し至て精く至乃志を

みもつけひ。味ひハ殆へハ菓子ある人れ言ふイみん
あてなる殺の言をふ。ふくふなを二ツ三ツ作うして切き
くるに殺ぬと。ひとり古地神を拝へ。おなくとみつ
うう育して静かに走り身おさすり。又粒メて心を
うふ咲るふ多し。高安の女も此めしふ飯とくくた
さたうふ人々ちのうふ。きや器拝うくすく凝くら
きて。いひり山のやま橘。飯顆山の夜雪嵐ふ
居士八四休 居士也
飛らくし。四季おの聖菜お煮て居ちう孫ち
うく手なを作くハ粒ちを体して体ん。暖めと
くものを初くぬしハるー。一椀さハやうふ二椀を許

の作うを構ひ。ひこ椀嵐のさくをくめ一白たち
まちぬくふまちん。ふやしおき飯うなと。散
をくの椀を言ふ。ちくて千とせ枕睡る。瞬と
艸堂ふ拝ん人ハ。齢八十八乃身を稀なく
す。家信金んというあしくおとの茶をなくく
示しをス
坐田八良茶 生九世也
文りもこうくく稲の香保をくく
半日拝ひ乃家廬ふしてたくわく述く
茶二拝祝を謝こく茶
大君風雅ふ茶。書淡く月を田毎れ新をむえ。

清別業の花乃春ハ草に燃え。香れ梅ひ笑
の行かひもの葉に清らなり。窓くのすもを
くして近し。遠きハ光琳乃へだてゝあれ秋清
鶉鵡乃なけハしとぞ。此日いつ成日なし。家艸庵

雲花ハ茶ノ一名

に恵み多ふ子の三ツ。雲花を壺中に香起含
み。宇治の橋姫ちしなく袖を覆ひ。青苔白
に清して立田の暖を奪ふ。土もてはまやかな
るれまつうる井川かうの徒さまひるよし。
清くむかれし後うしけにはやし。一ツハ
甲意きハさを押う清をて。唐し先極かくと

有さまけるく。護ちの波を疏えて夕風をさ
きらて名古着れさくうも今散り夜に寄り
うるさ。雨の蹄のきくだはけるにぞ。捺らりち
と号て使賓ニ穀をとぶき冴さらを極めし。今
一ツハ志うきらうれ良功もうあち能るくまり
に風札のふ行りておとうゆしく。誰元家虫の栖
やいさんや去乃系葉れ包ひむ子なられハ麝諦
桃と尸ゆへり。極くさにあく袖ハ秋のくま甚れ雲。
炉火に札多いとく延しくぞ結る

第三　愛蓴説

愛蓮ハ
愛蓮子ニ
対スル語也

水の州陸の草を愛る中に。世人ハ花の富貴なるを
愛て移ひて。唐の名を牡丹とかへ。風雅なるをいとふ
者ハあるにも作を割て樵者の飛せる。業好ル人のむつまし
く思ひしんするる枝あらに香風の遠きも八清し。蓮ハ(ハナハダ)菜
泥より出て。小余境の朝日にハたわまず。夕陽に亂
れぬ君子をまねくあはれのとなりて。亭々葉亭乃
器に誇つて。盃の数一盌喫茶

かゝる横川の
さくらよまあく 上略
某氏ノ歌

志ゆんさいの申ぬく八首れ玉の
香る人にすゝまる古きのこも。横川ふたくに月哉や
としれこ其の蘭のさくらにそむく。渠もいてハれ色き

茎のさかえ。初鴨を不待暁の夜を轉するも余むへあり

其四　城西の坡下舟を泛ふ

日成り桃花いろんして源をなし。柳絲(ヨモムロ)に吹
て水波静なり。舟を流に任せ舟を待れハ梅
陽して風に本こ従ひ槳(カヂ)に落きより。天清く暮
し。病る三子に縦ひ行ふを放(ホレイテ)して。酔に蘇り
ひ芦のかん哉捜し。何くまと知らくゆくる袂中にれ
すも。随ひて涎る波よけ山ふいるゝろ志ゝもろさ
けして情(ツラク)わりふ乎。岳の神をわすれ高人の清

廣寒宮の柏
文章の事
後ヲ以テ之ヒ

を振し。廣寒宮ふらしハの枝を並へてよく何をとれ

うふ。首切の名ハ山ちりも重くなす業ハ無ふを
ゆ。も拒し。ぱ山施頂ふ大拒へと毎こを名言し。
千れれむをひ言ふ出る帆を遠りぢとり雲居
外のむれ白ひを配ゆ。孤峯要と成て波の屏
をとむ。国ま一世ゆ功ゆり。志ふも今安ク生ン
やおほやゆのためくみ波うねハもく家茂
伝ふ平て下れれぎねひいと毎ふし志し。法
度の国くれ者を積ふ船をふ以彩ふ。
都くの市志ふく白く深ま く画て布 茂義
竹ふちさみ。ちふし話世れ風流を

吹し。ほふ鳴ふりをとみ。者をうとへてそな川
ふの價の描きを切くふ。川口ハいきほひ。
大江田子のく名ハ行ちて百家今茶家の勢
ひ。三笠れ山子出しほうもわしを子作り
ふ。ふ乃とろいへ原津ふ八海ふへくんや。塔り
ゆ。ふ武とおれのみ源元祥ぬさハのむひし
とうや。宮ふいぬうきふ形し小ふ。あやし
く解を左ふとりてふ原へをめ風情。
花橋のむうしめきておうしくうをふある
あふ。婆婆ふ切ゆをを。爲名のきねふてか

蚯レヤ二 垂尼 比丘尼也

しら浪清み。結き絹をまとひ。篷窓に
おとなひ篷窓に飛入。篷窓を出て、舷を掠
め舟に飛ぶさまざまなれ袖うれと。孤鷺の
東より西すぎりもなやし嗚呼何人ぞ。嘻々
昔是蘇志まりし古の孫の鴨妻舟乃ゆさまし
や。ちぎりを非に又川舟のうれやまあざめ生
世なれつる物となすれと。凛としくも
忠や仁孝や八あ里なむ。我てれとしめんや。
清く病日に益なき波しみぞあらりに
こゝろ己に怨て。惜し粛然として恐しくて。

吹面不寒
楊柳風

春を横みし笛おゐのに。一唱の清さなきを忘れ
虎丸柳浪ま濡まとや枕乃花
のふ隣海一千里ふ潮なく。大のつゝ花を成て
蛤ハ小町のふ楼をや。然奥許に人をもや。
酒をくみ魚を肴を投うち。ちなみて吹て
ふかあそゝの形りと。楊柳を手折。三子ハ男の京
にゆるをそゝむ。春日ゆりる。天きらくしくぞ
後の東ハ武蔵山を離れの波霧夜よのあれハ
異の花種にて扁舟錦城の光ちらし。是
時甲辰三月三日

第五　雜話　盗人の禅

彼卓を覆る酒家多し。或夜械来て窃を
行ふ義を張て酒義は這入るを待ち
程なく木枕を抱くを握と思ひ
後あるを待て方こへその上ひざを置人幸
ふ枕をとらんとおもふさ面ぬのをうき世の
命はもつれたる夢に成碎と知りて蓋
所なく枕を抱て熟睡し夕宮下る
日ふ弱るき覚て義より四を覗き見被ハ大変
不ま健形るあ男二十余人勢めしを打てひ

酒桶司也

居おうれるを盗人出んとすきを道なし此祢
だけ桶司より義は来るへし命を一すぬ
形しいのやいうふと立夫を尊し御とんを定め
芸縄をなたち来ましてまこころの九を捜しも
しく腰ふさし尻をあふ張りのうけて義の戸
をぐるくぐるくまを遠意なく打ぬ食
命ちび居る大労の命を口さ用もすす玄一
文字で大まを作てよいくくあいくくと考
をあくこのふこのけて振ひてもる男ともを打をぐ
これハ何のしどやなんぢや是をもちと見るだら

まゝ盜人かも用ひすゝびまゝ思いくゝと
世乃計靜りまちもり中戸を振りいで詩を
もまたして起きりる此時に一会信云の志なる
世盜人乃丈夫を必をまちん

八角ノ磨盤禪語也

中山ノ君ハ一杯の羊羹を二を國を二を家四ハ食
不吟入ゝ盜人を二を半あゝまゝ詩藝
紙念窮不可住城あゝと昔吟ふ清く賛之

亡国名ハ司馬子期也戰國策

芳六　真岐艸

再斯可之夫子季文子云語

再斯可也とハ日く人のうへの宝成へ一句を徐孔

多々訟未見内自訟者也

ゝをゝを神なし世ぺる山のゝ月の茶よ咲ゝ
の俤四ゝ子つゝ訟るの風色ゝん元文亨の秋を
しめれ江雲よしゝ清作。虫鳴嗅洞あり杜府る
おほ神　世ゝ月まゝく久しく神ことゝなりて例
有侍者を辞ゝ清流名茶さうへ酒をむをひ
古を冬一新意を得ぐるゝ云ゝ酒ゝ動ゝハ
腹菓を解ん喜句ハ

蛟ハ絶ゝ波をゝ花を菓乃身

むはゝ世つゝと
ゝハゝゝ
みつゝゝの
ゝゝき世ゝ
いゝゝゝゝき

世の波乃ゝ絶ゝを詩りて花ゝ紙ゝあゝ菓に
ゝ九日ゝ夕はゝゝ蛟の離の芳しくも靜

作者の作語あり

にみえてなる句形ら世ならしやと尋ねられ。予云
不可也。此日の句ハ菊の月といふより人も称すれ
あり世ほど下五文字を家にはらくよれそうく十三
夜の月に詠ひよせ。菓の字をもて句ひ世にふるもん。
後の月に菊や月とを詠ひなる一句。往昔らし

富士の佃西行ありて文字[illegible]　仍以下五文字[illegible]

つ、蕉翁にあられなどよくいひ取さハ　富士の佃の
秋来とかきりありしと玉雄ハ。名く奥に入かな
用て語ることにいひて作配あるやかれをむき杜甫
来て几遠に眠られず。句をめて後帝る一十三
日録　後ある菓取自夜哉と亠東大方ん歎して

五文字によろしむ。若くして一指に痛しいまみ便二指
にひろれ。いうらわうり何ニて三思にいらら世。今時
連俳の徒人。六十一翁なし先て開ありて世人ハ云連歌ならぬ
別とは出句の上にして輕を論ずなす。奥味風流く
ハしく欲弁ントし已忘言神を行て古徳にならうて。

此間有真味欲弁已忘言　陶淵明句

五文字哉並深くりとも。俳諧の句後進にあられ。
静におだやかりしくハ其寺の達人なりて、十三夜に菊を
むすひて一句哉取さハ天下取舌を識んと
九月十三日の芳をとはら下にして一句を拾てて用捨
取的なにあらんれ。人ハ十三夜ハいのふくをたらら責

九夜十日　九夜日にハ十日新治　俳諧く連歌

ちまたもおこしもかくさりなり。幸より四夜到る

照らしたる子家おほのこと無ふ　清光三秋月を惜みて　照らしなげいたりく

謝云自有東山鼓金屏笑坐如花人　李白　打笑り。香きく拍なりて笑坐如花人と因み弦く

しまのなかをくまなく遊び事書　あそびどもの

あそびもとまいまるも。上達アとさこゆ　弦とつのやうみこと

たちつみをはらへの云　古弦まし事おるハ。先とあるふへうあり。先弦はうと

おちつく　伯云れ侯と云ようして　伯しうけいせいも。ふ目もすりまるなるなる不事うう

云ようして　伯云れ侯と云ようして　伯しうけいせいも。ふ目もすりまるなるなる不事うう

はをを　民の伯の友うき　「ことうれそをの那如

まくちをと　志の山吹を　いうく人あも侘ぶや。すみよしの天伯して拍てひる

志の山吹を　うの乃ぶを　人もて表れ　好　人くふ一句を舞姫うぶと

古人こ弦きくれ一夜て秋乃月

時夜好六十　一夜元未決　義ノ古通家ノ孝言義ノ知方輔仁親王十三夜の月をは

小井ハ伊賀　忠橘成忠ノ　し先て弦ふとい人と毎十四夜の清光を今文ふくと

娘中宮ノ　小井里右の　例の紅ハしく弦くし至第ふ。頌りの日皇都山拍弦伯し

時放蕩のれ　りむれあり　ようぶ弦をと昌迪十三夜乃句ノとく角申

波なしと菊又一夜すの月

清ふおくろき少ふ奇弦ふ。志ふく胸をこの至ひ整

うよかろくと袖を志先に。連弦の境今日ふれ事不

ふあくまう叶へ至ぶの時絶唱佳作を字くるふ。北野の社の

伯子の秋を　御教ふもおひふきね伯子弦秋を弦うれ夜

御まとの秋をふう

梅原のれも
ひろいて書
なにらん
全部集ま
ハ情の光清う
奇
歩行て至
寺まも
又たまし
手ぬけて
おとしろき
秋とこそ

て書こふれしられ草はハほうこくとも。ニ光雲地と
とれらひ伝る。甚又の吉平まと平ら八月十又表石山
源氏の間ふて戸出る原
死れる明日本の月に自形ふ市ひ武
と云句を死のもとも梅嶽ようろう秋寺と
あれらうろう春の自の新元形ハ
心はうの秋ハきよ寺
去の奇ふて一句とのひ市ん。源氏の間にてや
第寺智へいのしとうさま寺る。ふ山桜度も弱れ
寺原とそお書市ふ白斗去て元ろう秋寺原や

あのろう
次ノ去の
引奇

きえる。まとに奇矣の人形うち。次ノ巻ヨ源
をこ一寺を寺祇と、きる八この所ヨ夏ふ形ろん世まと
弐形一名元子
云鈔祇寺家
女去年偽ヨ
あり
平　「落子ハいの市ある神形ろん感原も形さけも源
和スルも流まさるも武ものろうとろと形。昔今の人の人と
自ろうしたを支も形ろ人し。去死形んと　「花ヨ
祥ろくハむのりとふて去死ん世のさ〻ろ紀の至月の比二月十五日死ん矣と西行の形
武奇寺平　平　月　祇武と上八れ佛去のみハ形ろと紀去と形の
うさろハむのりと昌迦とあり去死ん矣と云句引出しうろうのろくの形平又まの
いひ矣き
ん乃改き
と常ヨ咩の夜伝アリ仍出ろ
碧梧金波　去れりと小死市世ろ去て生涯の市おあり めと市のろ山間
三五初八月十五
夜陪亭ヨ
院作ろ
菅淳茂
碧梧ノ句ハ　述ろ
起句玉不知
結句七言律中略也
碧梧金波　三五初武夜陪乃玉ヒふ如祥のろく八月乃

篇序詩曲流ハ家隆ニ引要ヒテ書キ其ニ五字當時流行ヲ日ク有ヘシ
他ハ不記ヤ

時元文ヒ一年九月仲旬

第七　楚ハ集四日經版

元寶序詩
古今ニ名序
ハ嘉ハ敬語
元

叙ヒテ曰ク拙ハ其文実ニ不敏ニ中旬ヒ甚ヒ孤案
ヒ古人風雅ヒ積神ヒ有ヒ食ヒ客ヒ以ヒ為ヒ樂

紹巴ハ二
戴恩記出

斗ヒ漢ヒ上ヒ拙ハ称名院殿紹巴ハ食の者ヒ為ヒテ
世ヒ中ヒ一ヒ人ヒ有ヒ者ヒ其ヒ人ヒ也ヒ

元食ノ字
同ク古今
ニ名序

ヒ成ヘシ有ヒ者ハ書ヒ房ヒ之ヒ孤ヒ
ヒ元食ヒ於ヒ之ハ有ヒ人ヒ云ヒ伝ヒ紀ヒ者ヒ元ヒ食

東附庵

第八　東賀ヘ行る

繫月繫
日　文選

海ヒ東ヒ雲ヒ樹ヒ花ヒ月ヒ詩ヒ酒ヒ手ヒ行ヒ客ヒ
日ヒ秋ヒ繫ヒ月ヒ東ヒ海ヒ之ヒ高ヒ人ヒ老ヒ愚ヒ畫ヒ剩ヒ有ヒ

日高丈山清
風生
各序　全部

一ヒ室ヒ樓ヒ之ヒ詩ヒ亭ヒ似ヒ図ヒ有ヒ之ヒ者

周五覺

ヒ吟ヒ一ヒ日ヒ高ヒ者ヒ丈ヒ山ヒ有ヒ人ヒ眺ヒ新
濃ヒ也ヒ菜ヒ皮ヒ門ヒ和ヒ分ヒ喫ヒ面ヒ腹ヒ有ヒ人ヒ信ヒ風
ヒ生ヒ事ヒ去

第九　惠南律師稀年ヒ賀

ヒ詩ヒ法ヒ式ヒ行ヒ法ヒ会ヒ者ヒ詩ヒ
ヒ人ヒ人ヒ会ヒ者ヒ人ヒ者ヒ

仰ぎ古えを思ひ、たりひとふ所ろ、親を言ひ乃
葉ふも世下ふて、志きりの日暮れ枝ばを過りかへし
ばらく月。玉は雪の中ばさうれ家はまを庭ホ
うつしてそこてたちうるを。閑一物れ志と。諫ふ
短をみかうう出くらけ引半多へや。をとの色
を欲ふ不思名利をものし移ふ恵徒呼の壽求。
はとしは八九の春秋二ッ外も。ぞうてもぞる庭きを
をみちの朝夕ぞうやまやの白ひをこうちれひて。
れのはうの高徒。頭りれるこを。人怒人ちさひ。人
徒人ちうぞ人ちるれふく。恢平は寿ても

五文字
常云ふ
古語

矩を諭を城ろや法のゑ衣
ゼアちる一雨人。歳をホまはるこちて。
四家の老人事付庭志れ紙呈ス
ヂ十　春日筍城ひ一人ろとへ別ふ
発陽恐ノ
字ハ北山法皇
ヨリ筍ト聖
老ヲ女三ヘ
ゆうぐへちまの八忠一ろ行毎。北山ふる寺ばうさうち
うれろ行ろ人の林ちりるこうかとて。五六ぞ六
七ホ家ばちの桔さ庭ばひ。聖ホハ法ばかうう
志ばううた。塀出セ拾ろさた古ろかとゆ。ばしくホ
ばう行ろうまこうた世後魁ちるひうう面ぞん家
平鬱是ぬる平。志ろうく春雷のひくき波りし

表もゆ牙みしかさるゆかくもいらしに行くの牙
お拔へ絆綱乃襟紙はうね。或ハ肥人の簑を倒
しやたきおしさるゆ風粉ひ。穂先キ形勢ひハ乱そ
のふりあるく繁紙奪ふ乃いろゆう。所てハ紙うり
えきは角うり。お拔しあるうれるゆ。おみなほ
ゆ走り走りあるてゆ。ゆやゆ。ゆうちうへゆまされ去ゆせ
めと。ほさうくと引放てハぎくあやしけよ光
いうなる姫行方知れ星。いの成姫を生出んと思ふ平。世下よりうん
りとんひう星。いさるとゆうふあうへんとてふ平。
うと切敷しうあくちふ約瓶と名つけ。ふりて繁

龍笛ノ一名能牙トモ云

紙思ふ水紙をうりうきちゆ平汲とう。紙をあくへ
まのうるけれむうゆ。けれるのはうまうる今をう
はうなしゆ。ゆさらしく刷うハはあるうて拔き
しあれハ。沖中川乃いく細きね紙浮ふ。ゆ平ゆ
融をして七孔をあくへゆ紙吹しめハ。ほ紙を葉

馬驥笛ヲ能ク吹

ハ音ふ敷りうくゆ。岸の枯葱ゆを拔へ形をつま。
精列お紙ハ。ゆ紙ハ又吹やをうん。
はうくゆ考姫よかはうきううゆ紙ゆうあくく

考姫ハ父母也

ふあゆ。信ふゆ平ゆ敷ゆるうゆやいうて紙君
のおいうたをを拔ゆして。實ち拔ふて中く

竹胎
竹ノ皮ノ

らめてうれる毎。後ら又三月まで已よいさたちき
れてうる。竹胎の風流成ん〻と陸士乃歌不
用人法く紙成此まて謝ス

廿一　張邑湖

張邑あり膝下拓て彈る人なし。柱を斜に
らて波ふ如成りて。柱の名を懶田れ橋ふ云
四絃一筋
九十日
四絃一筋九十日。弱法日れあけほめまて還て。樹
四季ヲ四絃
ヲ擬ヘタリ
動て草悠て。氷筍成化る日華三月盡ヲ彩る後
任侠
男伊達ノ
を孫て。雪も氷も言れ奏る法巻ふさたふ。梅ら
校いら先しく。任侠れ為ひ倩たのうまく北不あふ

ダマリモノ
桃李不言

肘を法て。乃毒れ場成性好を焚ら腫陳れ
らぬき。風を結ず。ひ（芹ヨリ）拍云影りて泉吹き。桃李の
だまりの成管て表の国れ香。人成投る。かさりて不
美女あく。姿ふあらたに采女よあらきれて盃をとる。
肩成展風流愛すく〻。撥面くみうら光れる髮
称もとろ
念仏よ
ろ
れたらう尾法く。ねもとろんまとあるね表らな。六面
子光梅ノ
一名
らう来ませらん。独揺きていとむよく。子光のん
成なあくて。拍をたり表とたう管ヲ成り。九日とる云
九日ヲ云ま
長能ノ
ヲ
ヲ表重。外の花ひるの受成あらん。柔法のく様
をらふ。芽れ輪乃ひ波秋風不皆る。桃李萩む

楓葉荻花
三両声曲
琵琶行
楽天

けぶり紙数とる。三両声の曲をかきうるる風心ちして
けりた。雲雨ふりて年月日枝の空よ印して晩れるや
この西四時則絃とちり機織結ぶうへし。琵琶の大サ蓋山乃
かゝみよ余れ。そゝこし紅をめゝり潯ゝを六十余里の
ほ。傳紙紙ふ拙紙もりゝ人。欠百人三百六ゝ度。雅
ゝ此琵琶を探ゝく浮ん。首弾しゝる人あゝ紙ゝ

百年三万
六千日
李子白

紫式アと
いとさるゲ
文法曲流
ゝ

書けゝ姫。蓋仕宣孝ゝ書。上東門院女房。筆紙つゝ称
て機ゝ。俳上紙抱て考ゝくゝゝ

いつまゝの
相垂髪詩

いつまゝ此俳時みゝ女御更衣のあゝさゝひゝ紙中み
と慶紙紙して考ゝ一ゝ二仰をのなておけし

おゝゝゝ
竹川ノ考ゝ
ゝ
ゝゝ人ゝ
名山叢考ゝ

ゝゝれ考ゝれゝゝ也。ゝゝひ風きた。後へおゝゝ人韻をゝ考
て。ゝ上光有水清く江平満。花を山陰よみちゝう。弾し
納メて霧の袋ふ陰し。雨の糸ゝてゝく〆ゝゝゝ月
紙撥ひ。不二山のゝゝ考ゝ如

才十二　雑話　六章

一背去岩人ゝ所家ゝは。白雲ゝゝ山破月中ふる
小車を或大家ゝ御契れむゝ孤ゝ絡ふ
ゝゝ。破月ゝゝ極山ハ御家慶して後ゝゝ御あゝて形く
きゝゝし又ハ奴ゝ斗拾ゝ有。俳ゝ紙慶た文武

朝ゝ
水極ゝ
ゝ
ゝ

の安ゝゝく帝平和ゝ此道紙好ゝ絡ひゝのうへ

土御門内大臣
山寺の素堂
賦へ

それ道筆の法なく。古人の工夫既に上なしへ和漢の
殊なれども其の道はきはめ人も多り世世を隔ふ
半の筆書なり殆ふうへ。弁こそ相まとあるべき
らせたまふ。或おもひ定めて雪ふりそれた歌の明る哉
仮うきのひて。先考あるまゝかとおもひたくけてと
変半あるべて

寄さはまた先とハまゝ西哉わりをもて
あとさにつけ初雪殆のなゝさ

御名素堂忠平と称す京洛にて古文年前の句
文あるを殆をしらふ乃自

ゝ晴ふあふ。野君内府公御門前とす
殆ふ。ゝ吾の一橋表れ一閣をかく屋をなを
月。ゝの傍青風の青水の秀みつゝ月ゝを入
れおゝひゝて。御師師範への問答多の仮八千里一置
蕉庵哉素堂ゝ以ゝ其枝をたふの法ゝあ。
ゝ。ゝゝゝ殆ひくゝてゝ殆ゝみ勢めたまふ堂
とれ仮ゝ。ゝれ仮常なゝ武門ゝは先つき
ゝゝ。ゝ先哉宝てむゝ今ゝなを加
らひたまゝ実ゝも稀ゝ殆ゝ仮ゝ人先ゝ
の山乃幸れ下隠あ人を加ゝるたゝなゝゝを

分数さまざまめ給ひしをみよ　玉は海神の手にぞ渡
うらにを四府公をきちふ責たまへるもおもあんく
との御言も年をうくり。時より時よりかう侍れ
ぞ　やあらくんいのくを祭る神祇の御りく後る日数
をんうー。たくおとむきをはふさふ奏関源く
と御ものあつてかみつうくあ侍光祈をて
拙ーくをとてとくとて寿の数く御なよれし
たまうんうー。天機をんーくーくはとふ奇特の
りねみてを有るまさ四墨の白ひとたよて
の水くきうは常の外よてくふ数まへうかんや

と院宣ありく色くれば四府公みも感と拳なくに眉
をくおは常おくして和歌の併をんうあんをん
みくをまうさ聡くてうひたまへくはなな
く御歌有る筆の紙のひくまれ姿をたくても
うたりあくー。歌八をを神祇宣ありくれとそさ年
うくハーくれくはくみかくて四府公うう野君
へありの中作へくまくればくくうみあくて
くくありかくかうくたるとくを作る年紙
結を日紙拙は日ふ弄まして詠奇ー作る事の云
下なくくや。奇道のうき事今程お記く事

歌をも筆とあそばすふるまひて秀逸一首を
疑ひ深よいひ出る事師恵をなりとアおぼひ
しとやんのれおとをもけうて書人の業なる風雅
なるへしをなれあるをのをもかるを久しく
世古名人上那の外世まあるすべてやとた
ちひまつけるるみ新八をうハ金りなるるる
とて業紙振りをるとを笑談有るる
一路五常ま坊をとるふ空姿のきやる紙口るせる
四角ま見るま別て四面れ別層をるふ坊を
も配當をける事常あり。或ま形象のみ性

此本ふれをと作るを色々れを一大事の御用をあ
と御次ま五四角不別る四面のる層微塵も数
らをを別るる本の側ま象をる御業へも書れを
御模姿を振してぷうるかれをるさのむさを仕方
ふて作るいをくも坊をとるる刻る指出るふかや
るの業者れをくふをを有ふ能をきおこの
るものなる。坊をるもかをを加をく別をせをある所例の
大く別層紙配當してるをを作て不をるる紙
ふをを名れ八光をを作あて世思惟したまひ船
の人紙ゆしてかくれをる遠ふを文八を尋給ひ名れ

え。伽藍者アラレハ坊を庵ハ房或包堂又次くの
御用ゝなをへたるの設方あんゝ御形系を律義
ものゝ法ゝ房を兄ハ仏事お次御用の心ゝ引ら
さらとアふ。癸ゝ分たゝひ。形系或先て坊ゝる
ハ房或堂むゝて あゝん古人も竊香と書堂作
責ゝふ不及家ハあゝゝゝと御機姪おゝたら
ゝ かゝるゝ。御奇の道いうふゝ仏功ゝあん
とおゝひ御ゝ
一部ゝ家源香御詠ゝゝ房結或ゝ結ひ御
用ゝ書ゝゝ自ゝゝゝ家御詠或御京師ゝ法

らあゝゝ武の御徳ちゝくまゝる者ゝて人情の言
低ゝゝに素ゝたゝゝゝ所人ゝて ゝ家格の
言情者と世人言ゝゝ家ゝ御ゝゝ如信哭者と
終夕奪里ゝゝ。文武或大和御立国の時八州ゝの御心平
けひ御ゝ中ゝゝゝ如。有時御自情のゝゝものゝふく
硯或作自筆のゝやゝ花ゝ或白ひゝ家結或中ふ
れちの山並川の侍心へゝえなる筆或ゝのひ御機姪
影ゝふゝくれゝく。詠ゝをめゝゝゝその方今ゝゝく
名人と世ゝ参ゝゝる人ゝくおゝゝに感んのゝなゝ收
御姪或れゝゝ言外字源ゝゝ如ゝゝて御言者加

くおもひ也。動たつ退く御家老ふむこうひ。唯今
の御定書世にあり。うく霸ふ祖よ家老とあ
やのふとそ。ちりは見よりも私義を常く御
家老ハ毛頭疎ふふ事なきにたゝ文花の風様他
此家とは格ふ事なり情なりて此度御用を神以
利益ふかりつ不申候ふ御道具ふなり作松よと一筆く
ふ魂成ある也と御一陣へ申る対所ニ御新文書抜
奥へ入せたまひ御家老を呼めし。唯そ方動ふ
ろ申る一言きふ心物ふ象。唯今ふ知入成ふ心へ
一個ふへも入れ屋うとれと猶と申後ふへしふ御ふ也

御家老ふ心ふ作下されふ語ふ長ふ心うれ
ふ申ふ申ふ也れハふ方ふ有ふとは少ふるうき一言
也寧盗ふ成おく屋ふ成若ハいの斗の價ふて申付
ふて役人ふ事ふ字ふうふのうへお射の價ふ申伺ふ一倍を
ふへし黄金成ふふふふ必一倍動ふふをし作ふへし
さ形ふて去打角ふ支ふ申ふふる拍子ふ道具ふ
ふす。業ハ大名ふ成まりて益を貪ふて万渡世と
もふへし。そのうへ物ふなれを用る方ふも主ふ変ふ
ふ屋し御家の此度ふ細工ふ神以利益ふ加ふ
如ふ拵ふ成ふふいひ作ふ益ふきふ作ハ有ふ

伊そ渠ホう世益の理弐あつ〳〵へ例ホ是事きくな
くこん弐ふむむさくてけうふるかし。世度乃弐第ホ
てこ年さうゝ他のすホくて後世弐ゝなくアて
こゝそう被ホし拙ゝも奥有へ。なくさみてくもんよ
うゝん利欲弐外と云道奥さ乃ゝホなゝ弐排奈
の一言ゝよ伊ても入弐とあよとアなちと我伊ゝも
ゝる。勤たつすこく京へ帰りんを法ゝう弐刺(ナス)たり
めおゝひかゝとゝを飛かく。那波弐ゝへまつり紀てぜ
時て所人の言語とおゝひすふゝる八伊のやくふゝね
す皆下果ゝゝる中ホていひちたゝひかちなり。どうく

生伊第目かゝをちつゝたゝのハなゝ也弐君ハ貴人
の貴なるゝのゝ伊事那ゝかく斗れ右面とたゝふ赤
面と云も中ゝ懲ゝて我を家とたゝふゝを額ホ
汗をもるゝんなる。伊ゝ伊ホ入帰りてゝ内外不立と那
波へ報ゝり。三ま左ゝり経ゝ弐弐伊教光被はてゝの
ゝ勤ゝ法ホ入中ゝる弐ゝ弐弐ハ源氏紀りホく弐君
へ伊ホ乃中ゝるゝゝ表話ありゝる。源氏紀りと表話有
中より宮て弐不越乃弐弐ホ伊ゝ乃ゝと味し
を宇伊ゝ中ゝのすゝと暫くためゝひ志ホどゝちすと
たくやみゝり。回しゝゝを弐弐源氏紀りゝる少ホ宮の

不成次なる清話もあれ　うさ物ゝさ白ひ首へ
ものゝうりハ常平仏ゝみ　きたるもの也○文つゝへ不
もゝちておとひみ　おきさいたゝかりかるゝあし
ゝもおはゝうしなゝ　以ゝたゝへゝふぎゝくしたる不
ゝれへきなゝりやゝて　ゝゝひ給ふ孫をゝハの以
ゝんやうよんゝに作ゝゝゝて中ゝるふくむゝ
ゝゝゝ不定
然ゝて人の怨りハゝゝあ安ゝゝへゝ況や孤雁の
君也ゝゝ也
一白居易ハ子をさたゝて枕ゝ孫ゝ孫ゝゝゝむと

訓ふゝり白氏文集仏孫法をて見侍ゝゝる不仏ゝ
ゝゝも如しいのゝゝり久ゝゝゝゝふ有ゝ事やゝんハ極の
一今生紙て形成法ふゝゝゝゝふゝハ急好年謡乃作者と不
ゝゝハ嬰児も常平口すゝむ事ゝゝり以外上留り法
中裏の祖ゝゝ古大雲説経ゝゝゝゝくハかゝ家極と云しを
の拾頃ゝゝは摘ゝ及ひ義ゝ支後銃後とゝ考也甚未
流ゝもの卒章の二支仏骨孫新ゝゝく志ゝも如ゝ流
孫を失ハゝるゝの掲焉あゝゝゝのや
一芭蕉翁紙中形成ゝふゝへ　ゝゝハ蕉翁乃骨ゝゝと
て翁をゝりてなゝを孫失ひ芭嗄の正道孫育て乃を

責利を得る事ハ適て方力有れ連中も芭蕉風
をかやつのものとおもひ涯おもくして乞非なき境
也蕉翁今茅らを見つゝ度を矣ひ分死し

廿十三　犢鼻褌（トクビシ）を贈る辭

比叡山の児ハ色〻く黒羅〻〻ゆ〻れハ老
師乃ものゝより七月七日縞六尺ハ加事贈ものとて
もろさしも星へさ寺一犢鼻褌（フンドシ）を

日枝（ヒエ）よりお詠乃詩乃志〻糸
と添く校乃細布を贈〻ものと給。元禄〻〻思
ひ合せ哀かし日の中ハ中ハ作詩をよくいつてる

犢鼻褌（フンドシ）

児ノ夏良運記
又ヘタリ

國民の常なり沈ふ思くトハ白キとを知ハ一
世以志るところを。羹（シウ）子おろそか之。借款文花
の一系。文もを破るの徒なるんか。ゆれ色〻と
〻てめく〻く法用ひ〻と。貴人を扶二を〻〻
めんハ癒を出ものと國治ものゝ〻せるも。さとれ詔
のはゝをむすひたりろ

廿十四　陸陳舘宿へ贈る文

吸去昂偉〻〻忘キ〻て伝〻〻ハ事。扶会し哭の
〻て〻今紹〻風有ものゝ
京泊ふ共ふ拒ひ共ふ雖彼よいてゝ。乃なく最後

白酒初熟
山中帰
李白

ふまんとて。鄙上陳市に行く草庵の老の酒熟るを聞く。走て陳の市に行くに。たゞ酒の香のみ有り。大和流やたを張る。家に帰る。武陵の桃の咲くを見て。桃源を尋ぬ。人間にあらぬ所。楽りいとうくして雨もふられ。雲霞の中。今夜を明け渡るも面白きかな。乃乃忠の事をもうつみめ乃紙。紙布の

声トよミと
対する文曲
九

もひ寄て

見るに心脆き日数し　雑詠

ふるく奥戸廻りて氣

必ひ見合ふ〳〵ひとをとこ

九月廿七日

ふるひ出る事ハ桂八ゆ有り桂八

交体ゆハ行くも有る入ひ出る

廿十五　紀陽分樹亭ゆ於ふ

本清玄ハ
王右軍ノ語
分樹然ル
故爰ニ名
仍爰ニ
換新ノ心有

分樹本清眞子ゆ有るに年有り泥絵の白梅花
咲ける数日爰ゆ於ふ愛ゆ咲く桜ゆ
紀小屋の家ゆ有れ俤ゆを孕み雨を含む。北ゆ来
る風の白ハ今　花恩有る恩ゆ来

雨よりおのほうゝ庶人の意しれ吹来りて四時
往ゝぐゝをうく四方はたゝ九条ゝ内府ゝ
をさみをなひしおほくの人れ学の海と屋敷ゝ
ものふあるしれこのほかあるして灯をなとし
新家を掃して生涯をすなる風流節を立て
ゆるをゝ世乃中庵としてまだ臨なるさあ八
乗せる新鮮ハなし　あて乃輝

オ十六　竿秋をとるもゝ葉
新の家住ゝ世の一姉ハ意義藜杖をとゝ
し旅立ゝ名おゝ人ゝ陰れ梧の黄をちゝき

ワの国ハ
名くの人の
家乃ハ中
ものへも
屋敷ゝ
ら

後九条殿
乃孫

スキハ千ロガロ
乃吾庵
老杜カ句

羊ゝ名
竜ゝ袋式
二ハ千ゝ乗り
ハの風新ノ
宝ゝ

墓後ノゝ
ものゝ古ゝ
ゝん

やうゝ香稲庵竿秋ゝ初紅柳ハ和音ゝ
ゝ山しなを出ゝ乗むゝし雲出ゝ出ゝ竜の袋
と号けゝ家古沢陀を通る見ハ出ゝ硯ゝ
石土ゝ名古倭の中山おくれ細ゝ入ゝを張し半ゝ
ものゝ松浦の船を洗ゝ家屋後南ゝ立れ破乃
香三の谷れ夕阿蘇山の雲ゝ背今ゝ歩むゝ
てゝれよおゝし浦き長途なゝんとゝ和くゝあ
作る

享ゝ廃て参芦辺ゝれの歌

岩享保十六年ゝ三月下旬雲きゝく山

[illegible]

第十七　病叟幷覗賣

発句文選風雅ノ語　嶺風八度人の風なり怒濤八松栢の下を奔り千丈の
代林莽を精鋭し竹を吹切り巨を割る[illegible]
切り立て切口刈藁を含て自然と飛ぶ笹たるく
岩打波の如くに借地情を遠くとどまり深き
雪をとらむるかあらば或八鍬を打てうひ絃を写さ
孤雲の如くへきやうの那ぱら冷こ霧巷を似る
へきものなし。仙吉原をあるこの八と云四十余りの
大男。ほ[illegible]ちてはくとれ沙をはら[illegible]

[illegible]八日の五つの時を過ぬ芦の門外を過ぬ。
梁蕎ノ古事　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
余[illegible]
の一[illegible]
一升八[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

又六月の教えへ口を抜て若このちびは根幸
ひ手もとも靜り行き消へるを知へ切夕の庭こそ大
王の風もしきて誘あくハ隨窓よ吹来て庭を無し
樹を寧よ。日の日ハ日も多くに色しを紅よそ
有き原。力ハ女蝦背あるみ〻ぞ赤く嗚鵲とん
ぎ市〻も愁よ死生卒して長月もいね発ア夢
も絶く形〻市り

大王ノ風又宋玉ガ言ヒシ

カ女ハ蝦背あるみ〻を絶る示

擬〻ぬ身〻〻ぬ殺風小き〻〻も
別も なんぞ形あんそれちめ片隅よの市り
と拵さ原。さまてあなを石に形まて一杯一杯玉の意ふ

擬殺ハ絶る示

百川朝水ハ原ノ居士名ナリ比藤寺朴道禪師参ス

元文五季秋下 淡々百川朝水居士木槿窟ふ記之

才十八冨天よ絶る示教

ハ〻を絶長刀 和歌ハ刀 是奇を拔美 詠絶を
相思ぬ〻へて絶刀を利遠くえれとをするや絶を

寫氏カ歌ふ原公を殺一桟よく掏を定め人ハ乃えれ時ハ市を て市て功ハ寫氏

左傳ニ出

荊軻カ事ヲ館子て原公を殺一荊軻を始皇ハ孫をく

史記

寄こを此時絶長刀ハ長さ一なを例へる市
ぬ〻原一絶刀を図子市を長一を原一を原ハ
ハなを〻を此時秦王の佩る劔ハ長きよを

ちよ投事ゆるさるを莫無且ら茶嚢なくて別
紙をへ〜長たとて報ずるを恐るべうしたく。能ク法
如を心を定めゆるを藝道何ソ仏をまを云るを知し
唯見性為〜ら平甚的成指をへ〜あく用ゆを
説法八宇俗よ云る事はや〜嗜て言記ふん
を為を神代の教へ儒朝の道をそむへれ
ずされを中興祖道を祖義吸社を負徳を
芭蕉翁真角引下て洒落翁て道統を時今俗
ゆ今世俳。押ゆを業を行ふ弦格并教統を
舊例式新古式及廛貶を今掛をの三ツ物

撰集笠岩古式を含ま書く教ゆ上古能ク慎を
ちを遠を二の書ゆを他門をより正統有へ〜不
知ゆを仏法ゆ凡余る程を教ゆなを八。凡概約
を外を有ゆ姿あり序跋并撰者を事ゆ書
ゆ記れりしく〜ゆ不文の為を文章も考ゆ
神を句を一句稿の稿ゆ始め芭蕉の頓水かを
笠の句神尾記を記を記を文ゆ行を毎ゆ
うん世ゆ和ゆ竿秋へ凡領を流りゆ時を記を
の記面の芭蕉ゆ下仰し世芭蕉の極を芭蕉の黄
稿を作りを記ゆ稿し〜ゆ也書ゆ。八書を記を

そもそもこれ一通り清嘯抄録を高文堂
社のところ考えみ出るうそ書てかゝやた
業へたまへ

青村尾

清文集書第一終